

## 第4章 熊本医科大学

### 第1節 前史

「熊本大学医学部」の前身校は官立「熊本医科大学」であるが、それは1896（明治29）年に創設された「私立熊本医学校」の発展形であって、しかもその創設には1870（明治3）年に閉校となった熊本藩の「再春館医学所」が、間接的ながら関与しているので、まずはそれらについて簡潔に触れる。

再春館医学所は、肥後細川家第8代藩主重賢により1756（宝暦6）年に設立された藩校であるが、江戸の「躰壽館」（私学だが幕府が支援）よりも9年、また、鹿児島島の「医学院」（藩校）より18年早い設立であって、近世日本における公的で組織的な医学教育機関の嚆矢である。重賢公は1755（宝暦5）年に「時習館」という教養教育のための藩校も設立しており、これらの教育機関が、文教の地・熊本の風土づくりに大きく貢献したことは疑いえない。その後再春館医学所は組織的に漢方医を育成し続け、盛衰はあったものの1870（明治3）年まで115年にわたって機能した。

維新後の1870（明治3）年、藩知事としての細川護久が藩政の西洋近代化を開始するにあたってまず行ったのが高等教育改革であった。すなわち再春館医学所と時習館とを廃止し、翌1871（明治4）年に、熊本城の出丸であった古城の地（現在の熊本県立第一高等学校敷地）に、「熊本医学校（古城医学校）並びに病院」と「熊本洋学校」とを設立して、それぞれオランダ人軍医セゲ・ファン・マンスフェルトと米国退役軍人リロイ・ライシング・ジェーンズとを教師として招いて西洋式の教育を行わせたのである。当時の西日本の列藩の多くが富国強兵策に走ったのに対し、熊本藩は高額で外国人教師を登用し教育改革から始めたというところも、文教の地ならではのものではなかったと思われる。マンスフェルトが教鞭をとったのはわずか3年間であったが、その教えを受けた学生は132名に上り、古城医学校からは日本の近代医学を背負うことになる多くの人材が巣立つこととなった。日本細菌学の父北里柴三郎、日本産婦人科学の始祖浜田玄達、「東京帝国大学医科大学」の初代衛生学講座教授緒方正規などである。

マンスフェルトが去った後は、古城医学校は病院機能が中心となっていたが、県庁が古城に移転してくることになったため、1875（明治8）年に通町（現在の下通り入口付近）に移転して「公立通町病院」と改称した。この間、1871（明治4）年に熊本藩が廃されて熊本県が置かれたため、古城医学校兼病院は官立（国立）となったが、明治政府の「学制」を發布して教育機関の全国均一的な整備を目指しそれへの官費の使用を優先するという新方針から、1876（明治9）年に旧藩立の医学校や語学校への官費の投入が禁止された。当時、医学教育に関しては、プロシアの陸軍医学校に範をとった大改革が断行されつつあったのである<sup>1</sup>。これに対抗して、熊本県は「通町結社」を作って公立通町病院の経営母体とした。現在でいう医療法人・学校法人というところであろう。しかし、1877（明治10）年に起きた西南戦争により病院を焼失した。そこで北岡神社下に邸宅（光永邸）を借りて移転し「北岡仮病院」として活動を続けたが、1907（明治40）年に至って廃止となり、36年間にわたる

古城医学校・病院の歴史を閉じた。

県は通町結社を支援していたが、その一方で1876（明治9）年10月に手取本町（現在のホテル日航熊本付近）に県費を用いて「県立熊本医学校」を開校した。ところが4ヵ月後には

表1 熊本医科大学の沿革

年 月	事 項
1896（明治29）年9月	「私立熊本医学校」（校長谷口長雄）を創立。仮校舎を内坪井に設置し、臨床実習は「県立熊本病院」で実施。
1897（明治30）年5月	「私立熊本医学校」校舎を山崎町に移転。
1901（明治34）年3月	「県立熊本病院」が本荘村（現在地）に新築移転。
7月	「私立熊本医学校」校舎を手取本町の「熊本県立病院」跡地に移転。
1904（明治37）年2月	文部省「専門学校令」により「私立熊本医学専門学校」認可。9月開講。
1912（大正元）年9月	「私立熊本医学専門学校」を本荘村（現在地）に新築移転。
1919（大正8）年9月	文部省の冠詞廃止令により「熊本医学専門学校」に改称。
1921（大正10）年4月	「熊本医学専門学校」を熊本県に移管し、「熊本県立病院」を「熊本医学専門学校附属病院」と改称。
1922（大正11）年5月	文部省認可により熊本県立「熊本医科大学」を開校。同予科を創設。
1924（大正13）年4月	「熊本医学専門学校附属病院」を「熊本医科大学医院」と改称。更に9月「熊本医科大学附属医院」と改称。
1925（大正14）年6月	「熊本医学専門学校」を廃止。
1929（昭和4）年5月	熊本県立「熊本医科大学」を官立「熊本医科大学」に移管。同熊本県立「熊本医科大学附属医院」を官立「熊本医科大学附属医院」に移管。
1931（昭和6）年3月	熊本県立「熊本医科大学予科」を廃止。
10月	附属図書館（通称「山崎記念図書館」）竣工。
1935（昭和10）年1月	附属医院本館を焼失。翌年3月に復旧竣工。
1939（昭和14）年5月	「熊本医科大学臨時附属医学専門部」を設置。
10月	「熊本医科大学附属体質医学研究所」を設置。
1945（昭和20）年6月	「熊本大空襲」により熊本医科大学基礎教室・臨床教室及び附属病院木造病棟を焼失。
12月	熊本医科大学本部及び基礎教室を熊本城内二の丸旧陸軍予備士官学校跡へ一時移転。附属病院病室の一部を元藤崎台陸軍病院分院へ「藤崎台分院」として一時移転。
1949（昭和24）年5月	「国立大学設置法」に基づき、官立「熊本医科大学」は国立「熊本大学医学部」へ移行。同「熊本医科大学附属医院」は「熊本大学医学部附属病院」へ移行。同「熊本医科大学附属体質医学研究所」は国立「熊本大学附置体質医学研究所」へ移行。
1950（昭和25）年3月	「熊本医科大学臨時附属医学専門部」を廃止。
1954（昭和29）年3月	官立「熊本医科大学」最終卒業式を挙行。

その校舎も西南戦争で焼失したため、本山に仮病院を設けて、北岡仮病院とともに西南戦争負傷者の治療や戦後の感染症の拡大防止などに尽力せざるをえなかった。熊本の惨状を伝え聞いた東本願寺の大谷大教正の多大な寄附により1879(明治12)年5月に手取本町藪の内の坪井川沿いの地(現在の熊本郵政局付近)に県立熊本病院が再建され、同年9月には県立熊本医学校も再興された。このときの入学試験に合格して入学を許可された生徒数は150名だったという<sup>2</sup>。同年8月には浜田玄達が一等教諭兼教頭として赴任したが、県立熊本病院内には臨床教育用の病床の余裕がなかったため、監獄病囚を用いて臨床講義を行わざるを得なかった。1881(明治14)年5月には水道町に県立熊本医学校附属仮病院がつくられたことで、それも一応解消できた。

1882(明治15)年に文部省は医学校を4年制の甲種と3年制の乙種に分類し、乙種医学校出身者には開業免許試験を課し、甲種出身者はそれを免除するという「医学校教則」を制定した。そこで、県を挙げて甲種医学校認定を受ける議が高まり、県立熊本医学校は、従来の3年制を4年制に変更し、県立熊本病院を医学校附属病院にすることで、1882(明治15)年10月に文部省から甲種医学校の認定を受けることができた。甲種医学校の教師には医学士3名以上がいることが条件の1つとなっており、しかも当時は東京大学を卒業しなければ医学士の学位を受けることができなかったことから、地方公立医学校はきそって東京大学医学部出身者を雇い入れようとした。これが、この医学校教則が医学教育の中央集権化を招いた一因であるとされる理由である。同じ理由からか教諭の出入りも激しく、在任期間は1年から5年ほどであった。それでも、校長や学務課長を含めて6~7名の教諭は確保していたようである<sup>3</sup>。

政府は1886(明治19)年に「中学校令」を公布して全国を学事上5地区に大別し、九州を第5地方として熊本に「第五高等中学校」を新設するとともに、各高等中学校に医学部を附設することとして、1887(明治20)年に長崎に「第五高等中学校医学部」を置いた(長崎に医学部が設置された理由は、元来長崎は西洋医学の先進地であり、1874(明治7)年に「長崎医学校」と「第一学区区東京医学校」とが合併して「東京医学校」がつくられた経緯があったためと思われる。ちなみに、第一高等中学校(東京)と第三高等中学校(京都)の医学部は、それぞれ千葉と岡山に設置された。なお、第五高等中学校医学部は1901(明治34)年に独立して長崎医学専門学校となった)。当時は経済不況下で、府県立医学校は経営が逼迫して教育設備の充実を図れないところが増加していた。その経済規模に不釣り合いな医学校の運営からの撤退と普通教育の強化への転換を各府県に求めている政府は、同年、勅令第480号により府県立医学校費用の地方税支弁を禁じたために、翌1888(明治21)年3月には、京都府・大阪府・愛知県の3校を除く15校が廃止されることになり、学生は官立高等中学校医学部に編入された。こうして県立熊本医学校もその12年の歴史に幕を閉じることになった<sup>4</sup>。

他方で、再春館医学校の廃止後、出身の漢方医たちは村井雲台や高岡元真を中心に1882(明治15)年に山崎町(現熊本放送敷地付近)に「春雨社」という結社をつくった。そして、1874(明治7)年制定の「医制」が西洋医学による国家試験合格を医師になる条件としたため、1886(明治19)年には「伝習会」という医育機関をつくって自分たちの子弟に漢方医学と西洋医学をともに教育していた。1888(明治21)年に県立熊本医学校が廃止になったのを機に、文部省の認可を受けてそれを「春雨覺」という私立医学校に発展させ、高岡が覺長となった。教師には第6師団の軍医を囑託した。1891(明治24)年になると、松平正直

熊本県知事の勧めにより、春雨巒は熊本市内にあった木村弦雄の「済々巒」、有吉立愛の「法律学校」、津田静一の「文学館」とともに「九州学院」として統合され、その医学部となった（内坪井町の元熊本厚生年金会館敷地付近）。その際、医学部長となった高岡は、漢方医学を教科から削除するという苦渋の決断を行った。その後1894（明治27）年に日清戦争が勃発すると、第6師団の軍医や薬剤官が出征したために教師の補充が困難になり、生徒も激減した。経営難に陥った九州学院は廃止せざるを得なくなり、1897（明治30）年3月をもって県に廃院届けを出すに至った。

---

## 第2節 私立熊本医学校時代

---

### 1 県立熊本病院の再建と私立熊本医学校の創設

1988（明治21）年3月に県立熊本医学校が廃止されてからも附属病院は県立熊本病院として存続したが、1年ほどで経済的理由のため廃止されることになった。それを愛甲義実ら数人の医師が借り受けて「私立熊本病院」とし、第6師団軍医の応援を受けながら診療を続けていた。しかし1894（明治27）年から翌年に及ぶ日清戦争に軍医が相次いで出征したため、病院の維持は困難になった。この状況を見た松平正直知事は、戦費が嵩み国民の負担が増加して各県とも新規事業を見送っていたにもかかわらず、医事衛生の重要性を思慮し、県立病院の復興案を県議会に諮った。県議会が知事の意を汲み復興案を可決したことを受け、先の県立熊本病院長で熊本医学校の校長でもあった東京大学教授浜田玄達に組織と人事について一任した。浜田は、まず内科・外科・眼科・産婦人科の4部を設け有為の人物を各科の長に任ずべきだと考え、熊本出身で東京大学医学部を首席で卒業した松浦有志太郎に外科部長就任を求めるとともに、各科の長の人選を依頼した。松浦は就任を受諾し、東京大学同窓の豊田虎之進と秋元隆次郎を勧誘して、それぞれ眼科部長、産婦人科部長への就任承諾を得た。内科部長の人選は難航したが、当時愛媛の松山病院長だった先輩の谷口長雄を院長兼内科部長として迎えようと3人で決意したことから、谷口も3人の意気を感じてこれを承諾した。

3人は1895（明治28）年5月に、谷口は6月に、返還された県立熊本病院に着任した。谷口は、薬局長・医員・看護婦・事務係ら計35名を任命し、7月には開院式を挙げた。しかし、病院自体は旧態依然の粗末な建物で病床も足りないため、谷口は大浦兼武新知事に病院の移転新築の件を諮った。大浦はその案を1897（明治30）年の県議会に諮って可決された。移転先は飽託郡本荘村白川河畔で、買取費4万2,000円、建築費13万500円の予算で4ヵ年の継続事業とされた。物価の騰貴のため実際の建築費は24万8,900円の巨額に達したが、戦後の好景気で反対はなかった。1901（明治34）年3月、新病院の中庭で移転式が行われ、参列者は700余名に上った。谷口院長は、新病院は252床と旧病院の2倍の病床数を持ち、電気・蒸気・下水設備など欧米のあらゆる新機能を備えていることを紹介し「欧米で行われている手術治療はすべて本院で行いうる」と力強く述べた。後に山崎正董が招きを受けたとき、本邦に例のないスチーム設備のある最新式病院というのが受諾の理由の1つだったという。

このようなさなかに、先述のごとく九州学院廃院の危機が迫っていた。私財をなげうっ

て医学部を維持してきた高岡医学部長は、熊本の医学教育の伝統が途絶えることを憂い、松平熊本県知事と谷口県立熊本病院長に支援を依頼した。谷口は、松浦・秋元・豊田と協議した上で、高岡及び医師藤野乱<sup>おさむ</sup>を加えた6名を設立者、高岡を代表として、1896（明治29）年9月7日に私立熊本医学校設立届を県に提出した。かねて内議ができていた県は翌日に設置を認可するとともに、12月の県議会で1897（明治30）年度予算に2,000円の交付金を盛り込んだ。こうして校主に高岡、校長に谷口、教頭に松浦、そして幹事に藤野が就くこと、実習病院として県立熊本病院を使うことで、私立熊本医学校が内坪井町の九州学院医学部内に開校する運びとなったのである。これが熊本大学医学部の前身校である官立熊本医科大学の母体である。したがって、本学医学部の母体は、再春館医学校出身者たちの努力と新生熊本県立病院医師たちの協力、そして熊本県の理解とによって形づくられたのである。

## 2 私立熊本医学校の発展

発足時の生徒数は、九州学院医学部から来た者と新たに募集に応じた者を合わせた117名であった。また、谷口学長を含めた11名の教師が、基礎医学や臨床医学の科目にドイツ語、修身及び物理学を加えた16科目を教えることになった<sup>5</sup>。1897（明治30）年3月に九州学院が廃校となったため、山崎町の春雨社の土地建物を借用して同年5月に移転した（現在の熊本放送敷地付近）。1900（明治33）年には生徒数も300名を超えて山崎町の校舎に収容しきれなくなったため、本荘村に県立熊本病院が移転したのを機に手取本町の旧病院を借り受けて、1901（明治34）年7月に校舎を移転した。1903（明治36）年には学生数が328名に及んだ。ただし、医術開業試験に合格した時点で多くの学生は学校をやめていたため、創立から1904（明治37）年3月までに卒業した者は204名しかいなかった。そこで規則を改めて修業年限を3年とし、入学試験を重視したため、生徒の質も向上した。このように、必要な教育年限を決めた上での医学教育という態勢は育ってきたが、学生定員の方はそれほど重視されていなかったのであろう。

この頃の学生は、「杏」の文字の徽章のついた角帽をかぶり、多くは和服を着ていた。年齢は17歳から30代後半にわたり、出身地も九州・沖縄はもとより北陸や関東にまで及び（清国人も2名）、更に学歴も高等小学校卒業者、尋常小学校教員経験者、尋常中学卒業者、薬剤師、獣医師から内務省医術開業試験前期及第者までとさまざまであり、ただ、医師免許を取得するための医術開業試験を目指すという一点で統合されていたという。このように多岐にわたる学力の者をどのようにして教育していたのか、当時の教師の苦勞が偲ばれる。ただし、その一致した目的のために学生たちの勉学ぶりは極めて真剣だったという。さらに1898（明治31）年には、学生総代村上磯三郎から谷口校長への出願により「校友会」という組織がつくられた。これは現在の「熊本大学医学部校友会」につながるもので、会則20条を持ち、当時としては極めて斬新な組織だったという。1909（明治42）年には『熊本医学専門学校校友会雑誌』も発刊されている。校友会は、生徒相互の友好を厚くするとともに、教官の指導のもとに風紀の肅正などにもあたり、剛健な校風の醸成に役割を果たした。

1901（明治34）年11月には、東京帝国大学医科大学産科婦人科助手の山崎正董が県立熊本病院婦人科部長兼私立熊本医学校教授に任じられ、翌年1月に赴任した。実はこのとき

の裏話がある。山崎は「政府内では京都帝国大学九州医科大学を熊本につくることが内定しているの、医科大学教授になるつもりで熊本に行ってくれ」と浜田玄達教授に諭されて熊本行きを承諾した。ところがその赴任の旅路の京都で「京都帝国大学九州医科大学は福岡に決定した」という新聞記事を読み、愕然として谷口校長に電報で問い合わせたところ、「熊本には熊本の抱負がある。福岡に大学ができては負けないようにする」旨の長文の返電を受けたので、なんとか自分自身を諭して赴任したのだという<sup>6</sup>。山崎は熊本へ来てからしばらくは面白くない日々を送っていたが、高知中学の級友で後の総理大臣浜口雄幸が熊本税務監督局長として来ているのを知って大変喜んだという。

---

### 第3節 私立熊本医学専門学校時代

---

1903(明治36)年3月、政府は専門教育機関の統一を図る目的で「専門学校令」を制定した。これによると、専門学校は高等の学術技芸を教授する学校とし、入学資格は中学校又は修業年限4年以上の高等女学校卒業で、修業年限は3年以上と定められ、一ヵ年以内に認可申請を行わない場合は、それまでの医学校は廃校とみなすという早急な対応を迫るものであった。そこで谷口、高岡及び藤野の3者が設立者となって申請を行い、翌1904(明治37)年2月8日に文部大臣より「私立熊本医学専門学校」の設立認可を受けた。この専門学校令で、私立医学校中最も早く認可を受けたのは熊本医学校であったという。

学生定員は、熊本医学専門学校に新たに入学するものを本科生として総数300名、旧熊本医学校から転校させる別科生100名とした。その後、1907(明治40)年の「医学専門学校学科目及び其の課程に関する文部省令」に沿って教育課程を改訂した後の1908(明治41)年9月入学(この当時の年度開始は9月)以降は、本科生のみの550名の学生数に変更した。恐らくこの専門学校令によって学生数の定員制度が確立したのであろう。

専門学校令では、専門学校生徒は在学中の徴兵を猶予されるとともに、卒業後それぞれの資格を認許される特典が与えられることになっていた(帝国大学医科大学と高等学校医学部は既にこの認可を受けていた)。ところが熊本医学専門学校学生(本科生)に対しては、1904(明治37)年5月に在学中の徴兵免除が与えられたのみであった。そこで谷口校長らは2度にわたって文部大臣に請願書を提出し、ついに1906(明治39)年6月に「医師免許規則第3条」に基づく卒業生の医師開業免許の取得の学校指定を受けることができた。更に文部省は、1909(明治42)年以降の卒業生への「熊本医学専門学校医学士」の称号認可を行った。上述のごとく、この時代の教育機関などに就職する際の能力の信認には「学士号」が重要な役割を果たしたのであろう。いずれにせよここにおいて、入学した学生は基本的には卒業するという態勢が確立したと言える。

熊本県も運営経費に関して設立以来、私立熊本医学校並びに私立熊本医学専門学校を大いに支援したが、更に1902(明治35)年の谷口を皮切りに、大正初期まで豊田ほか9名の教授を1年ないし2年間順次ヨーロッパに留学させ、教育力の向上に努めた。松浦は1899(明治32)年に京都に、また秋元も1901(明治34)年に鹿児島へ去っていたので、谷口の留学中は豊田が校長を務めた。谷口の帰国に合わせて豊田が留学すると、谷口が校長に復帰した。1908(明治41)年12月から1910(明治43)年8月にかけては、山崎がドイツのミュン

ヘン大学に留学した。また、1906(明治39)年の谷口の医学博士号取得(東京帝国医科大学)を皮切りに、1913(大正2)年から1920(大正9)年にかけて山崎、安香堯行、藤井壽松、谷口弥三郎など8名の教授が医学博士(安香は薬学博士)の学位を取得した。

このような教授陣の研究能力や教育能力の向上の一方で、熊本医学専門学校は1879(明治12)年築の旧県立熊本医学校校舎を使っていた。年間授業料180円は全国の医学校の中で最も高い部類の額であったにもかかわらず、校舎の老朽化は甚だしく、廊下の屋根に孟宗竹を張って雨露をしのいでいるというありさまで、学生たちの顰蹙を買っていた。そこで県では、1909(明治42)年から5年間をかけ、総計7万円を県予算に計上して校舎の新築移転を支援することになった。学校側も工費6万円を工面し、本荘村の県立熊本病院裏手(現在地)に新築移転工事を開始した。そしてその完成なった1912(大正元)年9月に現在地に移転した。

高岡は、これに先立つ1912(明治45)年1月に老齢を理由に隠居したため、谷口と藤野の2人が設立者となった。山崎は1916(大正5)年7月、学校紛争のために校長人事でもめていた愛知医学専門学校の校長として文部省からの推薦を受け就任するために熊本を離れた。

熊本医学専門学校の当初の教育年度は、9月11日に始まり9月10日に終わるものであったが、1914(大正3)年から1915(大正4)年にかけての文部省による学制改革で、4月開始3月終了という現在の教育年度に変更になった。このため、1914年9月に始まった学年は半年間で修了している。1教育年度はいずれの場合も2学期制であった。入学資格者は、中学校卒業者又は中学校卒業以上の学力を有すると検定された者で年齢17歳以上のものとし、1922(大正11)年までは体格検査が義務づけられていた。ここにおいて学生の学歴の均一化が図られることとなった。

熊本医学専門学校の教科は、副科目としてドイツ語・修身・物理学・化学・体操及び医師に関する現行法令があり、本科目は、解剖学(組織学及び胎生物学を含む)・生理学(生理化学を含む)・病理学・薬物学(処方学を含む)・内科学・外科学・眼科学・産科婦人科学・児科学(小児科学)・皮膚病梅毒学・耳鼻咽喉科学・精神病学・衛生学(細菌学を含む)及び法医学からなっていた。臨床講義は、午前7時に始まり、教授が外来診療を行っている間は自習及び休息となり、外来診療終了後に再開という変則的なものであったという。

試験は、学則上、学期試験と卒業試験に分けられていた。卒業試験は、2年次修了時に、解剖学及組織学、生理学及医化学並びに薬物学に関して行われる前期試験と、4年次修了時に、病理学・衛生学及細菌学・内科学・外科学・産科学及婦人科学・眼科学・小児科学・皮膚病学及梅毒学・耳鼻咽喉科学・精神病学並びに法医学に関して行われる後期試験に分けられていた。後期試験の小児科学以下の5科目については各学生が引く籤により1科目を選択させていた。同じく前期試験の解剖学及組織学についてはそのいずれかを、また、生理学及医化学についてもそのいずれかを、籤引きにより選択させていた。籤引きといっても、試験当日に籤を引くので、試験勉強はどの科目についても必要であった。このような方式は、試験の多くが口頭試問により行われていたことからとられたものと推察される。

学生の角帽の徽章はMを2匹の蛇が囲んだものとなり、制服は一本綾の詰襟服、靴はフカゴムであった<sup>7</sup>。産科婦人科学教授の山崎正董は、生徒監という役職で修身の授業を受

け持っていたこともあり、学生たちから大変恐れられていた。正帽をかぶっていなかったり、制服のボタンが1つでも外れていたり、袴をはかずに和服でいたり、教師に出会った学生は6歩手前で立ち止まって敬礼をするという校則を破ったりした者を見かけると、学内であろうと学外であろうとところ構わず学生を怒鳴りつけるので、学生たちは山崎に“ドルネル（雷）”というあだ名をつけていたそうである。生徒監のほかに4名の学年監督教員を置き、また、各学年の生徒が互選した4名の学生の中から校長が級長と副級長2名を指名し、生徒監の指揮下にクラスをまとめさせていた。その一方で、熊本医学専門学校においても校友会が存在し、学生の自治により、会員相互の親睦を厚くし、知徳を磨き身体を鍛え、もって高尚なる気風を養成することに専念した。これによって、医学のほかに談論に運動に文筆にと、青年趣味の発揚を奨励したと記録されている<sup>8</sup>。

教師は、教授・助教授・講師及び嘱託教授からなり、1904（明治37）年の開校時は、教授8名、助教授1名及び講師3名が、また、最終年の1922（大正11）年には、教授18名、助教授1名及び講師13名が授業を担当している。また、教員組織として、校長が指名する教授で構成される評議員会と、教授全員で構成される教授会とが設置され、今日の大学に近い体制になっていたと考えられる<sup>9</sup>。

---

## 第4節 県立熊本医科大学時代

---

### 1 熊本医学専門学校の県立移管及び熊本医科大学への昇格

大正になって政府は、医学教育を専門学校から大学レベルに上げる方針を固め、1918（大正7）年と1919（大正8）年にそれぞれ「大学令」及び「帝国大学令」を發布して、単科大学の設立を認めることとした。また、設立者の区別による県立・私立の学校の冠詞を廃止したため、私立熊本医学専門学校の正式名称は「熊本医学専門学校」に変更となった。文部省の方針を察知した全国の医学専門学校は、既に校舎増設や教育設備の充実を図り始めており、大学昇格競争がし烈化した。そして、新潟・岡山・千葉・金沢・長崎の5官立医学専門学校がまず官立医科大学に昇格した。谷口校長も腎臓病の身を押し、熊本医学専門学校の昇格運動に乗り出した。それに呼応した熊本県は、1914（大正3）年度から5年間にわたって総額7万5,000円を助成して、校舎の拡張、給排水・ガス・電力設備の整備、図書・実験機材・標本の購入や蒐集を支援した。その間、谷口校長は狭心症を患いながら陳情のために上京し、発作を起こして東大病院に入院するほどまで昇格運動に邁進していたが、その道半ばの1920（大正9）年1月、脳溢血発作を起こして逝去した。谷口校長の命を賭した医科大学昇格運動を引き継ぐため、私立熊本医学校の卒業生からなる「二十日会」と熊本医学専門学校の卒業生からなる「十五日会」が提携して「熊本医学専門学校昇格期成会」を結成し、その総裁に侯爵細川護立を、会長には男爵細川忠雄を立てた。まず昇格実施のため県立移管を図ることになり、藤野と谷口の養継子で教授の谷口彌三郎とが熊本医学専門学校の設立者となるよう名義変更し、谷口の相続者である谷口暁との3者連名で熊本医学専門学校の土地建物のすべてを県に寄附した。こうして熊本県知事による「県立熊本医学専門学校特別会計」設置と文部省の認可とを得て、熊本医学専門学校は1921（大正10）年4月に熊本県に移管された。その一方で、昇格に必要と推定される100万



円の半額（残りの半額は県費や附属病院収益金で支弁する計画）は、期成会を中心に民間からの寄附金を募ることで関係組織に割り振りが行われた。また、校長には外科学教授の藤井が任じられ、こうして大学昇格運動が再開される運びとなった。しかしながら藤井には、性格的にも谷口前校長ほどの政治力や突破力はなかったらしく、新校長不支持の教授や手腕に不安を抱く学生たちも少なからず存在した。600名の学生たちは新校長らに任せることができず、割り当てられた1口100円ずつの寄附金を拠出する一方で、辻宣伝、提灯行列、路傍演説、公開大演説会や3台の車による自動車宣伝を組織して市民に状況を説明したり、文部大臣が大阪に出向いた際に代表団を大阪市公会堂に送って直訴するなどの熱烈な活動を展開した。学生の自治を重んじる伝統がこのような運動をもたらしたのであろう。こうして医科大学昇格運動は、県民を挙げての運動に高揚した。熊本県選出の代議士たちの働きも加わって、ついに1922（大正11）年5月、文部大臣の認可を得て4年制の熊本県立「熊本医科大学」に昇格した。その夜は、喜びに沸く学生や市民による提灯行列が熊本市内で行われたという。その一方で、1922（大正11）年4月に医科大学昇格が内定するや、藤井は校長と教授の職を去ってしまった。このため、熊本医科大学開校の認可は、病理学及び精神神経科学の三角恂教授が学長事務取扱として受けることになった。

医科大学としての最初の2年間は、学生は予科に所属していたため、熊本医科大学本科の教員は1924（大正13）年に就任している。この年の教員数は、10月までの就任者も含めて教授17名、助教授2名そして講師3名であった<sup>10</sup>。

## 2 熊本医科大学予科

県立熊本医科大学の設立と同時に「熊本医科大学予科」の設置が認められた。これは熊本医科大学本科に進学する学生に対する予備教育を施す目的で、大学令第12条に基づいて設立された高等教育機関であり、熊本医科大学の実働は予科教育から始まった。すなわち「熊本医学専門学校予科」に入学させていた第1学年80名と第2学年59名を、1922（大正11）年7月にそれぞれ相当する熊本医科大学予科の学生として編入させた。3年間の予科修了生を熊本医科大学本科に進学させる体制がここに整い、同年9月には中澤敬男が予科教授兼主事に就任した。

この熊本医科大学予科は、1922（大正11）年5月15日から1931（昭和6）年3月31日までの9年間、熊本医科大学が熊本県立として運営されていた期間だけ存在した。所在地は現在の熊本大学九品寺キャンパスで、新たに購入した1万坪の敷地を有していた。そこには、校舎（木造一部2階建）、雨天体操場、撒浴場及び兵器庫等の建坪700坪の建造物と、400mトラック・フィールド設備のある広い運動場が存在した。このような予科は、当時、北海道大学・愛知県立医科大学・京都府立医科大学・大阪府立医科大学及び慶應医科大学に附設されていたが、その中で最も充実した施設・設備を有していたという。予科は3学年制をとり、各学年の学生定員は80名、修了生はほとんど全員熊本県立医科大学に入学した。そして、1924（大正13）年から予科終了の1931（昭和6）年までの熊本医科大学入学者の大半はこの予科修了生であった。したがって予科入学試験の競争は激甚で、その倍率は1922（大正11）年の初回入試時に既に7倍あり、後には20倍まで上昇した。

予科で学生が学んだ学科は、修身・国語（含む漢文）・ドイツ語・英語・ラテン語・数学・物理学・化学・動植物学・心理学・法制（含む経済学）、地質鉱物学及び体操であった。中

でもドイツ語教育は手厚く、ドイツ人教師も講師として教えていた。予科を担当する総教員数は、教授15名、助教授1名及び講師9名に上り、当時の教養教育の重視と充実ぶりが窺える<sup>11</sup>。

本科では学業に専念させられた分、予科では課外活動が盛んで、現在の熊本大学医学部学友会の文化部並びに体育部に匹敵する種類のクラブを有していた。学内では運動会が開催されていた。学外的には、熊本4高専競技連盟があり、第五高等学校・熊本高等工業学校・熊本薬学専門学校との間で定期戦が行われていた。また、全九州大学、高等専門学校、専門学校競技インターカレッジや、全九州高等専門学校弓道大会や馬術試合が行われていた。合唱、管弦楽やマンドリン演奏、尺八演奏なども盛んで、定期的に演奏会が行われていた。1925(大正14)年になると配属将校が置かれ、学校教練振作が始まった。阿蘇の高原での野外教練や第6師団機動演習への参加などを通して、実践的な訓練も行われたようである。1926(大正15)年には、北原白秋作詞・山田耕筰作曲の「熊本医科大学予科校歌」も作られ、盛んに愛唱されたという。

### 3 熊本医科大学の2度にわたる紛擾と山崎正董の学長就任

一方、学長事務取扱が認可を受けるという不安定な船出が予感させたごとく、熊本医科大学は初代学長の選任につまずいた。熊本県知事や県選出の国会議員などの推薦依頼を受けた北里柴三郎は、東京帝国大学の佐藤三吉教授と相談の上、当時共立福島病院長だった松永琢磨を推したが、教授の一部に、学校教育の経験のないものを学長候補に推すのは賛成しがたいとして、京都帝国大学教授の和辻春次を迎える動きが出て、教授会において学長を決定することができずに終わった。これが第1次紛擾の始まりである。責任を取らされた中山佐之助知事に替って赴任した岡田忠彦知事が、教授会の意見の統一を得ようと谷口・中島両教授に辞職を求めたために、これに異を唱える3名の教授が進退をともにし、5名の教授を失った。しかし、紛擾はなんとか収まった。岡田知事は学長選任に奔走し、1923(大正12)年2月に山梨県立病院長の長澤伝六を学長に迎えることになった。これで熊本医科大学も軌道に乗るかにみえたが、同窓生や県下の医師と関係が深かった谷口教授らが大学を去ったために、募金の収集も附属病院の収益増も計画どおりにはいかなくなっていた。そこにおいてある人事問題を皮切りに長澤学長と古参教授との間で意見が衝突し、1925(大正14)年3月に学長が大谷國吉教授に辞任を求め、同教授が即刻これに応じたことから、十五日会を中心に卒業生挙げての大谷教授留任運動が起き、第2次紛擾状態に陥ってしまった。その結果、4名の教授が辞職して熊本医学専門学校以来の古参教授が1人もいなくなり、ついに長澤学長も1925(大正14)年の10月をもって辞職した。この3年間にわたる2度の紛擾の結果、10名の教授が辞職して大学としての教育機能が低下した上、附属病院収入も募金活動も低迷して予定を大幅に上回る県費の投入を余儀なくされたことから、大学昇格運動で支援を受けてきた県民からも「熊本医科大学は熊本県の癌」とうとまれることになってしまった。

このような危機の中で、長澤学長の辞任の日をもって愛知医科大学長の山崎正董を熊本医科大学長に両大学長兼任として招聘した。山崎は、1916(大正5)年に県立愛知医学専門学校長に就任した後、校内の内紛を取めた上、1920(大正9)年には同医学専門学校を県立「愛知医科大学」に昇格させて学長を務めていた。この兼任人事には愛知県から反発

も出たため、翌1926(大正15)年2月からは熊本医科大学専任となった。県立熊本医科大学は山崎学長を得てようやく安定を取り戻し、再び発展を始めた。

---

## 第5節 官立熊本医科大学時代

---

### 1 熊本医科大学の官立移管と山崎学長時代

山崎学長の来任以降は学内も静穏になり、学外も皆山崎学長を支援する姿勢をとったため、懸案だった寄附金の集まりも良く、「熊本医科大学附属病院」と改称された附属病院の患者数や収益も漸次増大した。

一方、熊本医科大学の研究成果を世の中に提供し、その収益で医科大学の経営を支援する目的で、「財団法人実験医学研究所」が1926(大正15)年12月に山崎学長の手で設立された。所長兼理事長には山崎学長が、主任には細菌衛生学講座の太田原豊一教授が就任して、感染症に関する24種のワクチンと3種の診断薬の製作・販売、感染症検査並びに臨床検査事業を開始した。更には、熊本医科大学、同附属病院及び実験医学研究所における研究成果などを広く世間に周知させる目的で、山崎学長の手で月刊雑誌『鎮西医海時報』が1927(昭和2)年に創刊された。この『鎮西医海時報』は、その後1942(昭和17)年まで熊本医科大学から発行された。また、1938(昭和13)年12月には独文・英文の学術誌『熊本メディカルジャーナル』も熊本医科大学発行誌として創刊された。

こうしたさまざまな工夫により熊本医科大学の教育・研究機関としての整備を図る一方で、山崎学長は医科大学の官立(国立)への移管運動を強力に推し進めた。熊本医科大学への運営助成費が県費を圧迫していたこともあり、この運動は、県知事をはじめ県議会、県選出代議士、県財界等々、県民総がかりの運動となった。この時期は、憲政会と立憲政友会の2大政党時代で、政権が積極財政を唱える立憲政友会に移った機を捉えるとともに立憲政友会の長老松野鶴平の全面的な協力も得て、1927(昭和2)年11月になんとか官立移管の閣議決定までこぎつけた。この間、山崎学長は1ヵ月間東京にとどまり、陳情と説得に奔走している。ところが、官立移管が決定される予定だった帝国議会で立憲民政党(憲政会の後身)が内閣不信任決議案を提出したことから衆議院解散総選挙になり、先送りされてしまった。次の議会も両政党間の激しい争いでもめにもめたものの、田中義一内閣の次年度総予算案がなんとか通過した。こうして熊本県立の熊本医科大学は、1929(昭和4)年5月に官立に移管した。同年11月11日には「熊本医科大学官立移管祝賀会」が盛大に催されたほか、基礎医学教室の県民への開放、予科グラウンドでの陸上運動会が行われた。熊本医科大学の研究室を見ようと訪れた参観者は1万人に達したとされ、午前10時の開始時刻を待ちかねて、生化学教室入口から大学正門外へあふれる長蛇の列ができたという。また、翌日には熊本市立公会堂で記念医学講演会を開催したが、これも大変な盛會を博したという<sup>12</sup>。一方、官立移管に伴い熊本医科大学から独立した財団法人実験医学研究所は、その後、戦争の拡大に伴ってワクチン需要が増大したため、熊本大空襲による施設焼失まで発展を続けた。なお、財団法人実験医学研究所の事業は、1945(昭和20)年12月に設立された「財団法人化学及血清療法研究所」に引き継がれた。

このような山崎学長の30年間に及ぶ医科大学教授としての功績をたたえて、また還暦を

祝う目的もあって、1931(昭和6)年10月に山崎記念図書館(現在の山崎記念館)が竣工した。更に同年11月には、陸軍特別大演習で熊本地方行幸中の昭和天皇が官立熊本医科大学を視察した。翌1932(昭和7)年1月には、山崎学長が自らの信念に基づき学長並びに教授職を勇退したが、山崎学長が築いた礎により、熊本医科大学は第2次世界大戦時の難局を乗り越えることができたとも言える。

ところで、官立大学であれば学長をはじめ教官は国の官吏ということになる。当時は、官吏や軍人には序列があり、親任官、高等官、判任官という順であった。高等官はその中で勅任官と奏任官に分かれていた。当時の助教授は高等官7等(奏任官)で陸軍中尉と同等であった。教授には勅任官の者と奏任官の者がいた。勅任官は少将以上の将官に相当し、熊本医科大学長は勅任官最高の1等1級で、4大祭の式典においてはこの官位の順に並ぶことになっていたため、熊本県では熊本医科大学長、第五高等学校長、高等工業校長、薬学専門学校長の順に並び、県知事よりも上位だったという。

熊本医科大学は4年制、入学定員80名で、県立大学時代は予科卒業生を、また、官立移管後は高等学校高等科理科卒業生を主な入学対象者としていた。ただし、官立移管後は予科がなくなり、また戦時色が強まるとともに入学希望者が減少し、1934(昭和9)年頃の入学者は30名ほどしかいなかったという。教育科目は、系統解剖学・組織学・胎生学・局所解剖学・生理学・医化学・病理学及病理解剖学・薬物学及処方学・微生物学・衛生学・内科学・外科学・整形外科学・産科学及婦人科学・眼科学・小児科学・精神病学・耳鼻咽喉科学・皮膚病及花柳病学・法医学・理学療法科学・比較解剖学・医事法制・医学史の24科目と特殊講義からなっており、このうち比較解剖学以下は課外科目と位置づけられていた。卒業認定に必要な学士試験は、解剖学・生理学・医化学・病理学・薬物学・微生物学・内科学・外科学・産婦人科学・衛生学の10科目に加えて、小児科学あるいは整形外科学、眼科学あるいは法医学、精神病学あるいは耳鼻咽喉科学、皮膚病花柳病学あるいは泌尿器科学の4科目で、この4科目は、試験の15日前に学生が引く籤で決まることになっていた。

このような学則の規定を受けて、熊本医科大学の卒業証書名は『学士試験合格證書』となっていて、その本文は「本学所定ノ学科ヲ修メ学士試験ニ合格シタリ仍テ之ヲ證ス」というものであった。また、『学士試験合格證書』を授けられた者には医師免許証が交付されたため、厚生大臣と厚生省衛生局長連名の『医師免許証』の本文は「昭和〇〇年三月熊本医科大学ニ於テ受領シタル医学科卒業證書ヲ審査シ明治三十九年法律第四十七号医師法ニ依リ医師タルコトヲ免許ス仍テ之ノ證ヲ授与ス」というものであった。

教育と研究を担当する組織形態は講座制をとっており、当時は「教室」と称されていた。1947(昭和22)年の時点では、基礎系8教室(解剖学・生理学・生化学・病理学・薬理学・微生物学・法医学・衛生学)及び臨床系11教室(第1内科学・第2内科学・第1外科学・第2外科学・産科婦人科学・眼科学・小児科学・神経精神科学・皮膚泌尿器科学・耳鼻咽喉科学・理学療法科学)で構成されていた。加えて、附属体質医学研究所(後述の4を参照)に3部(体質病理学・体質形態学・体質臨床学)が存在した<sup>13</sup>。

熊本医科大学の学生の服装には制服制帽の規定があり、みんな角帽をかぶっていた。この角帽をかぶった医科大生は、熊本市民から非常に大事にされており、また自分たちのエリート意識も強く、例えば、おでん屋ですべて“付け”で卒業時に清算ができたし、コンパといえば芸者をあげて騒いでいたという。スポーツや課外活動は予科ほど盛んではな

かったが、柔道の長崎医科大学との定期戦などが行われていた。

熊本医科大学には大学院はなかった。ただし、1922(大正11)年の熊本県立熊本医科大学発足時から、医科大学卒業生で医学研究を目的とするものが所属する研究科は設置されており、研究科学生(当初は1年単位で1925(大正14)年の学則改正で2年単位)として2年以上研究して成果をあげた者は、教授会に論文を提出して医学博士の学位申請ができるようになっていた。1927(昭和2)年に初めての学位論文審査会開催の記載があり、1928(昭和3)年2月1日付けで学位番号1号が授与されている<sup>14</sup>。その後1954(昭和29)年3月の熊本医科大学最終卒業式までに、595名に医学博士号『学位記』が授与された。『学位記』の本文は「右者論文ヲ提出シテ学位ヲ請求シ本学教授会ノ審査ニ合格シタリ仍テ茲ニ学位ヲ授ク」というものであった。その後も、経過措置として1960(昭和35)年3月31日まで旧学位令に基づく学位制度が存続したため学位申請者が殺到し、最終的に学位番号1663号までの医学博士号が熊本医科大学より授与されている。

## 2 戦時下の熊本医科大学

山崎学長時代の末期には戦雲が漂い始めた。1931(昭和6)年には「満州事変」が勃発、1933(昭和8)年には日本は国際連盟を脱退した。1937(昭和12)年以来「支那事変(日中戦争)」が続く中で1941(昭和16)年12月にはついに「大東亜戦争(太平洋戦争)」が勃発した。1945(昭和20)年になると戦局は悪化し、日本本土空襲の危険が迫ってきたため、阿蘇郡高森小学校に重要な研究及び診療機器を荷馬車を用いて疎開させ、また残りの機材と学生実習用顕微鏡などを黒髪第五高等学校隣のライト回春病院とその近傍に設けた大きな防空壕に移動させた。案の定、同年6月30日深夜から7月1日未明にかけて熊本は大空襲にあい、熊本医科大学は、鉄筋コンクリート製の外来棟と西新病棟(耳鼻咽喉科病棟)及び図書館(現山崎記念館)、それに九品寺地区の体質医学研究所(木造)を除いたすべての建物を失った。しかもこの大空襲で、生化学の政山龍徳教授夫妻が直撃弾を受けて死亡した。

軍国主義の時代には、医学生に対して軍の依託学生制度があった。依託学生は、身分は軍に所属しており、毎月45円の月給をもらっていた。警官の初任給が40円で中尉が80円という時代には相当な高給で、1学期に行われる依託学生選抜試験の競争率は10倍以上あったという<sup>15</sup>。熊本医科大学からは、海軍に年に1名、陸軍に2、3名が合格していた。依託学生はもちろん、卒業生の多くは軍医として徴兵され、戦死した者も少なくなかった。最も多く戦死者を出したのは1941(昭和16)年卒業の組で、約3分の1が戦死したという。

1941(昭和16)年10月には「大学・専門学校の修業年限短縮繰り上げ卒業」という閣議決定がなされ、1942(昭和17)年3月の定期卒業の後、次の学年は同年の9月に半年繰り上げて卒業した。この半年短縮卒業はその後1944(昭和19)年まで続いた。高等学校も同様に2年半で短縮卒業となっていたため、10月に入学生を迎えていた。1945(昭和20)年になると、高等学校の修業年限が更に半年短縮されて2年間になったため、戦時下最後の入学生は1945年4月に迎えた。

当時10月に入学した学生たちの最初の仕事は、熊本市近郊の農村へ出かけて行く勤労奉仕の稲刈りだったという。その後、防空壕掘りや医療機械類の疎開を手伝う一方で、徴兵で不足していた臨床各科の医局員の代わりに、手術を含む診療助手の仕事を行うことも多かった。1944(昭和19)年入学生になると、空襲の危険が迫ってきたために、1班4～5

名からなる防火班がつくられ、それぞれ木造でできていた基礎教室の天井板をはがすなどして防火に努めた。空襲警報が鳴る中でぎりぎりまで講義が行われたり、防空壕のそばで講義を受けることもあった。しかし、そのような備えや努力も6月30日から翌日にかけての熊本大空襲には無力だった。そのとき使われた焼夷弾は「モロトフのパンかご」とあだ名されていたもので、焼夷弾数十発が積み込まれたドラム缶2個分ほどの大きさの金属のかごが投下後地上数百mで分解して焼夷弾が四散してくるもので、全く手の施しようがなかった。廃墟同然となった母校の整理も、その焼夷弾の殻集めから始まった。殻は長さ50～60cm、直径7～8cm、厚さ5～6mm、重さ700～800gの八角形の合金の筒で、1坪当たり数個以上落ちていたという。その後、沖縄陥落以降は、日陰さえ失ってしまった真夏の炎天下に、グラマンなど戦闘機の機銃掃射を避けながら、廃墟の整理が黙々と続けられたのだという。

### 3 熊本医科大学臨時附属医学専門部

当時、年間の新卒医師数は3,000人程度であり、急激な需要増となっていた軍医の確保が難しくなってきたため、1939(昭和14)年5月、附属医学専門部の設置が勅令をもって公布され、7帝国大学医学部並びに熊本を含む6官立医科大学に総定員840名の4年制の附属医学専門部が設けられた。その後、私立大学医学部や私立医科大学にも専門部が設置され、更には6校の女子医学専門学校を含めて医学専門学校が新設されていった。軍医として出征していった国内医師の補充も必要だったのである。「熊本医科大学臨時附属医学専門部」の入学定員は60名で、1942(昭和17)年に54名の初めての卒業生を出している。教授14名、助教授6名及び講師10名程度の規模で教育を担当した<sup>16</sup>。

1945(昭和20)年8月15日の敗戦により文部省は、連合国軍総司令部の医学教育課程の一本化の要請に応じて、大学及び医科大学に附属医学専門部の廃止を指示したため、1946(昭和21)年度からの入学はなくなった。熊本医科大学臨時附属医学専門部は、1947(昭和22)年に4年制を5年制に改め、1949(昭和24)年に166名、翌1950(昭和25)年3月に217名の最終卒業生を出して廃校となった。最終卒業組には、航空隊、陸軍士官学校、海軍兵学校や幼年学校並びに満州、朝鮮や台湾の学校からの転入学者が多数含まれていた。

### 4 熊本医科大学附属体質医学研究所

昭和10年代、講座の増設と研究能力の向上を目指していた熊本医科大学は、戦時下の時宜「現時非常時局ニ際会スルニ至リ体位向上体質改善問題ハ重要国策トナルニ至レリ」<sup>17</sup>として、附属体質医学研究所の設置を文部省に申請した。熊本の官・政・財界を動員した創立期成会を結成して設立を推進したことも功を奏し、勅令により1939(昭和14)年10月に「熊本医科大学附属体質医学研究所」設置が認められた。単科大学に附置研究所が置かれたのは極めて異例のことであった。研究所棟は熊本県から寄附された旧県立熊本医科大学予科跡地に建設され、1940(昭和15)年12月に竣工した。当初は病理学部門1部門から出発したが、1941(昭和16)年及び1942(昭和17)年に形態学部門と体質臨床学部門が設置され、更に、戦後の1947(昭和22)年2月に体質衛生学部門が増設された。そして1949(昭和24)年5月に、国立大学設置法に基づき、「国立熊本大学附置体質医学研究所」へ移行した。

## 5 南方特別留学生

大東亜戦争(太平洋戦争)の初期、日本軍は、当時の西欧諸国の植民地で資源産出地域でもあった東南及び南アジア一帯を占領した。日本政府は、1943(昭和18)年と1944(昭和19)年に占領下の南方諸地域から留学生を選抜し、将来の指導者を育成するために我が国に招聘した。「南方特別留学生」と呼ばれた学生たちである。1943年といえば、戦局は既に日本にとって劣勢であったことを考えると、留学生諸君は恐らく親日的な上流階級の子弟で成績優秀な学生達であったのだろう。1945(昭和20)年に日本に在学していた南方特別留学生は181名いたという<sup>18</sup>。そのうち8名(ジャワ2名・ビルマ3名・フィリピン1名・セレベス2名)が熊本医科大学に、6名(ジャワ2名・マライ1名・スマトラ1名・ボルネオ1名・セラム1名)が同臨時附属医学専門部に留学していた<sup>19</sup>。

留学生寮は水前寺公園の隣にあった高級旅館「東浜屋」で、日本人学生5名が留学生と生活をともにした。生活は厳しい日本式教育に基づいており、6時半起床(冬は7時)でラジオ体操と乾布摩擦を毎朝、夕食は午後6時、消灯は10時というものであった。手紙は郵便局で検閲されたという。また、留学生たちは柔道も習っていたそうである。当時日本では既に食糧が十分でなかったが、東浜屋の主人の尽力のおかげで、一般の日本人に比べるとかなり良い食事をしていただことである。そのような良好な関係もあってか、1945(昭和20)年6月30日の熊本大空襲では、留学生たちがバケツリレーで消火に努めたため、東浜屋は焼失を免れたという。その一方で、マライから医学専門部に留学していたサイド・マンズールが結核性肋膜炎を発症して熊本医科大学附属病院に入院中、病棟が全焼したが、辛くも白川端に逃れることができた。その後1946(昭和21)年12月21日に、九州帝国大学附属病院で病死した。

## 6 終戦直後の時代と熊本医科大学の終焉

1945(昭和20)年8月の終戦を迎え、熊本医科大学は、熊本城内二の丸に不要となって残った旧「陸軍予備士官学校」(「陸軍教導学校」の後身)校舎を仮住まい先として移転することになった。敷地は広く、建物も大小30棟を数えるものであったが、放棄された施設であったため清掃作業が大変だった。学生たちがのみやしらみと格闘しながら整備するのに数ヵ月を要し、熊本医科大学がその一時移転先で機能を再開できたのはその年の12月であったという。建物は、講義や実習のみならず、自宅や下宿先を失った教官や学生の宿舎としても使われた。研究棟の一部に仮住まいしていた教官たちは、学生宿舎の炊事棟や食堂を使って食事をしていただことという。教育機関と仮設住宅とが同居していたわけである。その上、附属病院は無いに等しい状態だったため、「附属病院を持たない医科大学など無用の長物としてつぶされてしまうかもしれない」という危機感が広がった。そこで、学生と教官を挙げての運動が始まり、隣接の旧陸軍病院藤崎台分院を、当時管轄していた厚生省から文部省に移管させて附属病院入院棟として使用することに成功した。そこは「附属病院藤崎台分院」と呼ばれ、1960(昭和35)年1月まで15年間にわたって使用された。更に、1947(昭和22)年11月には臨床系講座と附属病院を九品寺の体質医学研究所棟に移し、体質医学研究所を予備士官学校跡に移転させた。こうして熊本医科大学の機能は少しずつ回復していったが、食糧供給が極度に悪化した中で、教官も学生も、本荘、二の丸そして藤崎台の間を、徒歩若しくは自転車で、時には1日に数回にわたって移動しなければならなかった。

そのような戦後の混乱期、高森小学校などに疎開させていた教育並びに医療機材が医科大学と附属病院機能の再開に大いに役立ったという。だが、学生たちに行き渡るほど十分ではなかったことは想像に難くない。1946(昭和21)年に、連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)の指示で文部省に医学視学委員会が設けられ、全国の国公私立の医学部・医科大学・医学専門学校・医学専門部を査察して、存続させるAクラスと廃校にするBクラスに峻別することになった。西日本地区担当査察官を務めた大阪大学木下良順教授の後の談によると、「熊本に来てみると、驚いたことに、設備・施設はもちろん、顕微鏡などもほとんどなく、図書も不十分で、とても教育・研究ができる状態ではない。どう見てもBクラスであった。しかし、人材の方は、政山教授の爆死を除いて無傷である。そこで、『施設や設備は、いずれ金が出来れば整えることができるが、人材の育成は容易ではない。熊本医科大学には何にも勝る人材がそろっており、これを活用していけば学校の再建は容易である』という趣旨の報告書を書いた」のだという<sup>20</sup>。査察結果はAクラス・存続であった。文教の地の基本は人材にあったのである。

戦時下に入學し終戦後に卒業した学年の場合、学生の転入・転出の動きも激しかった。例えば、1944(昭和19)年10月入学で10ヵ月後に終戦を迎え、1948(昭和23)年9月に卒業した学年の場合、入学時の学生数は110名で、朝鮮出身者8名、台湾出身者2名、そしてビルマ人1名を含んでいた。終戦前後に満州医科大学から10名が転入学して来て120名に増え、終戦直後には、逆に東京帝国大学などの文系学部にかなり転出して91名に減り、更に12名の外国人が母国に去って、最終卒業生数は79名だったという。次の学年は1945(昭和20)年4月入学だったため、半年後の1949(昭和24)年3月に88名が卒業しているが、この場合も京城帝国大学医学部や満州医科大学などから10名弱が転入学してきたといわれている。

終戦後の1946(昭和21)年9月の卒業生からは、占領軍の指示により、インターン制度と国家試験とが課せられた。第1回目のインターンは1946(昭和21)年10月1日から半年間行われ、熊本県では熊本医科大学附属病院と国立熊本病院の2ヶ所が指定された。しかし、附属病院の医局には軍医から復員してきた若手医師が急増中で、インターン生を組織的に研修させる仕組みも場所も用意できてはいなかった。そもそも医師免許証を持たないインターン生にどのような医療行為が許されるのかあるいは許されないのかの基準も、社会的に共有されているとは言い難い状況だった。

第1回目の医師国家試験は1946(昭和21)年9月1日に行われた。ただし、そのときにはインターンを終了した者はいなかったため、歯科医師などで医師になることを希望したものを対象とした試験であったようである。その後、1947(昭和22)年から春(偶数回目)と秋(奇数回目)に国家試験が行われたので、熊本医科大学の終戦後最初の卒業生は第2回目を受験した。こうして彼らに交付された厚生大臣と厚生省医務局長の連名による『医師免許証』の本文には「昭和二十二年施行第二回医師国家試験に合格したことを認証し、昭和十七年法律第七十号国民医療法に依り医師の免許を与える仍ってこの證を交付する」と記されている。

当時文部省は、連合国軍総司令部から教育制度の抜本的見直しを要求されて、新制大学制度への移行計画を進めており、1950(昭和25)年4月入学者が官立熊本医科大学最後の学生となった。そして1954(昭和29)年3月の彼らの卒業によって官立熊本医科大学の医



科学生教育は終了した。巣立った卒業生数は2,071名である。その後も研究科と学位審査機能を持つ熊本大学熊本医科大学は存続し、学制改革により1960(昭和35)年3月31日をもって廃止された。

---

## 第6節 熊本医科大学からみた文教の地・熊本の歴史と風土

---

熊本医科大学の出自は、再春館医学所で学び市井で開業していた漢方医たちが、自らの後継者を育てるための教育機関として設立した伝習会並びに春雨齋にある。この学校は、現代版に翻訳すれば、熊本県医師会立医学校とでもいうようなものであろう。そして、その流れを受けてつくられたのが私立熊本医学校という熊本医科大学の直接の前身であるが、これも熊本県立病院の医師たちが、後継者の育成のために、自分たちの余暇を犠牲にしてのいわば献身のもとに設立され、維持されたものである。熊本医科大学は、明治の中央集権国家が国策として設置した高等教育機関とは全く異なる歴史を歩んできたことを注視すべきである。それは、むしろ中央集権的な施策に抗いながら、またあるときはそれを利用して、そして常に地域の力を頼みながら、医学校、医学専門学校、県立医科大学へと自己発展し、ついに官立(国立)医科大学として国家に認めさせるまでに成長した教育機関である。その苦難の歴史の中で獲得した人材と地域とのきずなどが、文教の地・熊本の風土の一面をつくり出してきた。そしてそれこそが、第2次世界大戦下での校舎と附属病院病棟の焼失を乗り越えて、新制熊本大学の中核として再生できた最大の要因であろう。

『肥後医育』の歴史というより長い視点に立てば、再春館医学所における115年間にわたる漢方医の育成、古城医学校設立による西洋医育成への切り替えという挑戦から25年間にわたる試行と挫折、そして私立熊本医学校の設立から熊本医科大学の官立移行まで更に33年に及ぶ絶え間なき努力による西洋医学教育態勢の最終的な確立という、近世から近代への移行の歴史を、熊本は自らつくり出したと理解することもできよう。その後今日までの、官立熊本医科大学から国立熊本大学医学部における80余年にわたる西洋近代医学教育の隆盛には、このような礎があったことを忘れてはならない。そして、このような医育における熊本の歴史と風土は、今後訪れるであろう激動の時代にあっても、それを乗り越えていく素地になりうることに想いを寄せて、大切に守っていくべきものである。

### 参考文献

- 1 山崎正董纂著『肥後医育史』(鎮西医海時報社、1929年(復刻版))
- 2 荒木精之編著『山崎正董』(山崎正董伝刊行会、1963年(復刻版))
- 3 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「通史」』(熊杏会、1998年)
- 4 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「時代史」』(熊杏会、1998年)

### 注

- 1 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「通史」』(熊杏会、1998年) 73・74ページ

- 2 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「通史」』（熊杏会、1998年）81ページ
- 3 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「通史」』（熊杏会、1998年）82・83ページ
- 4 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「通史」』（熊杏会、1998年）84ページ
- 5 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「通史」』（熊杏会、1998年）89・90ページ
- 6 荒木精之編著『山崎正董』（山崎正董伝刊行会、1963年（復刻版））38ページ
- 7 フカゴム靴とは、現代のサイドゴア・アングルブーツに近い革靴で、柔軟にするために側面にゴム入りの布を用いていたためそのように呼ばれた（『日本はきもの博物館』より情報提供）。当時の学生は、学生服もフカゴム靴も、東京の三越などから入手していたようである。熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「時代史」』（熊杏会、1998年）16・17ページ
- 8 山崎正董纂著『肥後医育史』（鎮西医海時報社、1929年（復刻版））650・651ページ
- 9 山崎正董纂著『肥後医育史』（鎮西医海時報社、1929年（復刻版））637～645ページ
- 10 山崎正董纂著『肥後医育史』（鎮西医海時報社、1929年（復刻版））703～707ページ
- 11 山崎正董纂著『肥後医育史』（鎮西医海時報社、1929年（復刻版））708～711ページ
- 12 荒木精之編著『山崎正董』（山崎正董伝刊行会、1963年（復刻版））703～707ページ
- 13 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「通史」』（熊杏会、1998年）214・215ページ
- 14 山崎正董纂著『肥後医育史』（鎮西医海時報社、1929年（復刻版））676ページ。荒木精之編著『山崎正董』（山崎正董伝刊行会、1963年（復刻版））207・208ページ
- 15 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「時代史」』（熊杏会、1998年）424ページ
- 16 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「通史」』（熊杏会、1998年）734ページ
- 17 「熊本医科大学体質医学研究所設立趣意書」の冒頭句。熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「通史」』（熊杏会、1998年）251ページ
- 18 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「時代史」』（熊杏会、1998年）161～163ページ
- 19 江上芳郎「南方特別留学生招へい事業に関する研究（14）—南方特別留学生名簿—」『鹿兒島経大論集』第35巻第1号（1994年）
- 20 熊本大学医学部百年史編纂委員会編纂『熊本大学医学部百年史「時代史」』（熊杏会、1998年）253ページ